

取組実績の概要 【2ページ以内】

広島大学は開学以来、「平和を希求する精神」と「地域社会・国際社会との共存」を大学の理念の一部とし、平成24年度に「広島大学国際戦略2012」を、平成28年度には「広島大学国際戦略2016」をそれぞれ策定し、「国際的な実践現場で活躍できる人材の育成と国際協力・国際協力の推進」、「平和を希求する国際的教養人の育成」及び「持続可能な開発目標（SDGs）への貢献」を目標に掲げてきた。

本事業では、全学体制で本学の強みである学問分野の教育・研究資源を提供し、「アジアの共同経済発展と信頼関係の確立による平和構築に貢献する中核人財」を育成することを目的に、タイ及びインドネシアの協定大学との学生交流プログラム（受入れ・派遣）を実施した。学生交流プログラムでは、アジア地域の平和構築のため、現地のニーズに応える重要な学問分野として、4つの専門分野（食品科学・農学、工学、経済学及び言語・文化）ごとの専門教育に加えて、国際社会で活躍するために必要となるグローバル・コンピテンシーを高める教育プログラムを実施した。

本事業による学生交流プログラム（受入れ・派遣）を平成26年度から開始し、留学中だけでなく留学前後においても修学・生活面で手厚い支援を行った結果、事業期間全体で101名の外国人留学生の受入れ及び85名の日本人学生の海外派遣を行い、本事業の目的である「日本を含むアジア全体における共同の経済の発展と信頼関係の確立をもたらす、平和構築に貢献する中核人財」の養成が着実に進展しており、本事業による学生交流プログラムの実施を通じて多くのノウハウを得ることができ、本学が実施する既存の学生交流プログラムの見直し・改善や新たに展開する学生交流プログラムの企画・実施運営に活用することができた。

1. 部局の積極的な協力と強固な実施体制による質保証のともなった学生交流

事業採択初年度である平成25年度を準備期間として位置付けの上、本格的な学生交流開始前に協定大学との連絡協議を十分に行ったことにより、平成26年度における第1期生の受入れ・派遣から質の高い教育プログラムを提供することができ、その後平成29年度まで学生交流プログラムを円滑に実施運営することができた。特に、事業採択後速やかに実施部会を立ち上げ、事業及び学生交流プログラムの学内実施運営体制を整備の上、本学の国際担当副理事とプログラムを実施する各部局の教職員が強固な連携体制を作り、共に協定大学を訪問し、機関代表レベルと部局間レベルの2層段階においてプログラムの内容や実施の手順等を具体的に交渉できたことは、留学中に修得した単位を所属大学で認定するスキームの確立等、具体的なプログラム構築を行うに当たって非常に有益に働いた。また、それらの交渉を双方のキャンパスにて実施し、さらに部局によっては教員の合同セミナーの開催にまで発展させ、特に教員同士の相互信頼関係を事前に構築できたことにより、初年度の交流事業から円滑に実施することができた。さらに、そうした教職員による事前の交渉を通して、①共通の単位互換制度として、2013年より新たな概念が導入されたUCTS（UMAP単位互換制度）の活用への合意、②専門教育科目の内容に関する互換性の向上、③単位互換をより円滑に行うための本学が受入留学生に提供する科目の多くを3単位化、そして④本学の学年暦（後期）を協定大学の学期制に合わせた開講期間の短縮化等、具体的な教育交流の手法に関する内容の調整を学生交流が始まる前段階で確定し、質保証が伴う学生交流プログラムを実現することができた。

2. 学生の個人研究とコンピテンシーの成長を意識した教育の効果

本事業は、受入れ・派遣双方の学部学生の専門教育と個人の研究成果を意識してプログラム全体を構成したことにより、単に英語力や研究能力だけが向上したのではなく、異文化の環境でも、また英語力が未熟であっても、国際的な環境の中で物事に積極的に取り組んでいくための様々なコンピテンシーの向上を特に帰国後の派遣学生の成果発表から見ることは、予想以上の成果であった。具体的取組は以下のとおりである。①「国際課題研究」科目では、すべての受入れ留学生及び派遣学生が専門分野に関する研究テーマを設定し、所属部局教員の指導の下、留学中に現地で実験、面談、アンケート調査等を行った上、研究成果を発表・議論した。受入れ留学生には、国際センターの担当教員が論文のまとめ方や成果

発表の仕方に関する授業を行い、研究成果をどのように対外的に魅力のあるものへと発展させるか学ぶ機会を提供した。②AIMS—HU学生セミナーでは、受入・派遣双方の学生が自ら企画・運営し、参加学生全員が意見を多く発言できる手法により学生の討論会を開催した。③コンピテンシーの測定では、受入・派遣双方の学生が7つのコンピテンシーについて留学前、留学中、留学後の3回に分け自らの成長を自己評価させた上で、その評価に対して指導教員等がコメントを与えることで、個々にフィードバックさせる機会を提供した。さらに、平成28年度からは従来のコンピテンシー評価に加えて、米国のジェームス・マディソン大学が共同で開発した臨床心理学に基づくBEVI (Beliefs, Events and Values Inventory) テスト及びBEVIテストをベースに本学が作成した日本語版 (BEVI-j) を留学前と留学後に受験させることで、学生交流プログラムを通じた教育効果を客観的に測定することができた。学生たちは、多くの現地学生との交流を通して、異文化間でも積極的に交流しようとする姿勢が生まれ、測定の評価では多くの学生が成長を認めた。これらの取組みにより、受入れ留学生からは専門研究の方法論を学ぶ機会を高く評価する声が寄せられたほか、派遣学生を指導する教員からは、語学力が多少足りなくても自信をもって積極的に研究発表に臨む学生の姿勢を評価する報告が多数よせられていることから、コンピテンシーが確実に向上していることが実証されており、さらなる海外派遣留学プログラムへの参加希望や留学生との交流に向けた自主的な取組みなど、学生交流プログラム参加後の学生の主体的な活動を通じて、事業の目指す人財の養成の実現が期待できる。

3. 本学学士課程教育の国際化への貢献

本事業を積極的に推進し、質の高い学生交流プログラムを全学的に展開したことにより、平成26年度に本学が採択されたスーパーグローバル大学創成支援事業（タイプA）をはじめとした大学の国際化を目的とした事業とも連動する形で本学の教育、とりわけ学士課程教育の国際化を推進することができた。具体的には、本学の学士課程における英語の授業科目のほとんどが英米語や文化に関する科目と交換留学生用に開講されているものであったものが、本事業の実施を通じて、4つの専門分野を担う5つの学部において、英語で実施する本事業で受け入れた留学生を対象とする授業科目が平成29年度までに46科目新規開講されるとともに、その他の英語による授業科目についても平成25年度時点で79科目であったものが平成29年度には817科目と10倍以上に増加した。また、学内の外国人留学生数についても平成25年5月1日時点で1,022人であったものが、平成29年5月1日時点では1,491人と約1.5倍に増加し、英語による授業科目数の増加と外国人留学生数の増加により、本学学内において留学生と日本人学生が共に学修する環境が整備され、本事業以外の学生交流プログラムにおいても交換留学生の受入れが平成25年度以前と比べて容易に展開できるようになった。さらに平成30年度にはすべての授業を英語で開講し、英語のみで卒業できる新たな学士課程の学位プログラムである「総合科学部国際共創学科」が設置された。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

	平成25年度		平成26年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
計画※	0人	0人	25人	25人	25人	28人	25人	28人	25人	28人	100人	109人
実績	0人	0人	25人	22人	22人	26人	21人	25人	17人	28人	85人	101人

※AIMSリスト掲載大学の変更に伴う計画の変更がある場合は、変更後の交流学生数を記載している。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

○魅力的な教育プログラムの構築

- ・食品科学・農学，工学，経済学及び言語・文化の4つの分野の専門教育科目に加えて，本事業による学生交流プログラムに参加する学生には共通科目として，「国際課題研究」科目及び「日本企業・組織研究」科目を開講し，受入れ・派遣学生双方に必修科目として参加学生全員に履修させることで，参加学生ごとの専門性を深めると同時に国際社会で活躍するために必要となるコンピテンシーを高めた。
- ・受入れ留学生向けの「国際課題研究」科目の授業計画の一つとして，広島平和記念公園及び資料館の見学及び被爆者による講話を設定することで，本事業で受け入れたすべての留学生に対して平和について学ぶ機会を提供することができた。
- ・派遣が決定した学生に対する事前学習として，目的別英語（ESP）及び現地語・現地文化講座を提供することで，留学中の修学面だけでなく生活面でも活用できる語学能力を養成することができた。

○学生交流プログラムの質保証に向けた取り組み

- ・本学と協定大学間での単位互換を円滑に実施するため，新たなUCTS（UMAP単位互換制度）の概念を用いた学修計画書及び成績証明書を活用するとともに，本学で開設されている授業科目の単位数の見直し（2単位の講義に1単位相当の演習又はレポート課題を組み入れる）を行った結果，プログラムに参加した受入れ・派遣学生が留学中に取得した単位の90%以上が所属大学において単位認定された。
- ・獲得すべき7つのグローバル・コンピテンシーを設定の上，学生の自己評価及び指導教員によるフィードバックを行った。また，留学中の学修成果を客観的に測定するため，平成28年度からはBeliefs, Events, and Values Inventory (BEVI) テストを導入した。

○派遣学生による受入れ留学生支援団体の結成

- ・本プログラムの第1期派遣学生OBが，留学体験で感じたことを受け，「東広島わくわく魅力探検隊」という団体を結成し，本プログラムで留学する受入れ・派遣学生のサポート活動を開始したことにより，派遣・受入れ学生間での交流が学生主体で活性化させることができた。これらの第1期生の活動はその後の第2期から第4期の派遣学生OBにより引き継がれ，その活動は学内にとどまらず，学生と地域を結びつける場として，地域の活性化にも貢献した。

○協定大学との新たな短期派遣研修プログラム（STARTプログラム・タイ）の構築及び実施

- ・本事業によるタイ・チュラーロンコーン大学との学生交流を通じて，大学間の信頼関係を強化することができ，その成果の一つとして，本学が平成22年度から実施している海外渡航経験の少ない学部1年次生を対象とした2週間程度の短期派遣研修プログラム「STARTプログラム」の1コースとして，タイ・チュラーロンコーン大学への短期派遣研修プログラムを構築の上，平成28年度及び平成29年度にそれぞれ24名，合計48名の学部1年次生を派遣し，平成30年度も同様に24名の学部1年次生を派遣予定である。さらに，「STARTプログラム（タイ）」の参加学生の中から本事業による学期単位の海外派遣留学への参加希望者も出ている。